その日、は静かに息を引き取った。

　まだうだるような暑さが続く夏の日。病室のベッドに横たわり、僕を含め数名の人に看取られながら彼女はこの世を去った。

　彼女とは幼馴染という名の腐れ縁だったが、べつに積極的に話しかけるほどそこまで親しくはなかったし、なんなら近所に住むただの同級生の女子と表現する方がしっくりくるくらいだ。

　だからあの日、彼女から誘われなければあんな場所に行くことはなかったし、一週間後に彼女が最期を迎えることとなった病院にも足を運ぶことはなかったのかもしれない。

　それくらい僕は消極的で冷たい人間なのだから。

　けれど、どうしてだろう。あの時の照りつける日差しに蝉の鳴き声、病院特有の消毒剤のにおい、そして、彼女が僕に告げたあの一言を未だに憶えている。

* ＊　　　＊

「久しぶりだな……」

　あれから半年ほどが経ったとある冬の日。

　気が付けば僕——はその場所にやって来ていた。

　そこは地元のしがない遊園地。それであるとともに、彼女に誘われ一緒に遊んだ思い入れのある場所でもあった。もっとも、向こう側はどう思っていたのかは今となっては知る由もないが。まあとにかく、ここに来るのはその時以来だ。

『あの遊園地にもう一回行ってほしいな』

　それが、病室で彼女が僕に最期に遺した言葉だった。

　吐いた白い息が空気に溶ける。片隅のベンチに腰を下ろし、一人辺りを眺める。

　こんな田舎にある遊園地でも、休日はそれなりに家族連れで賑わいを見せていた。さすがに都会の喧騒とまではいかないが、それでも目の前を幾人もの人が通り過ぎていく。前回来たときは平日の真っ昼間だったので、おそらくあの時の数倍はあるだろう。

　けれどやはりと言うべきか。人の数は変化しても、どうやら季節が変わったくらいでは景色は変わってくれないらしい。ジェットコースターやメリーゴーランド、その他アトラクションの位置はすべてあの時のままだ。それが嫌なくらい胸に突き刺さる。

「本当ならもっとずっと生きられたはずなのに……」

　——それは突然だった。

　一年前、学校で彼女が急に倒れ病院に運ばれた。幼い頃から患っていた持病が再発したらしく、それから約半年間、彼女は入院生活を余儀なくされた。その時は僕もどんな病気かは知らなかったし、下手に訊いて仲が悪くなるのも気まずかったので放置していたが、後から訊いた話によると——病名は難しかったので覚えていないが——どうやら心臓の病気だったとのこと。

　当初は治療とリハビリを繰り返せば治るかと思われたが、けれど数か月経っても回復することはなく状況はさらに悪化していき、そして一カ月の余命宣告を受けた。

　だというのに彼女は落ち込むどころか、真っ先に主治医へと外出許可を求めに行ったとのこと。最初はまったく許可が下りなかったらしいが、三週間が過ぎた頃、何度も頼み込んだ甲斐があってか病院側からようやく許可が下りたらしい。「ほんとに大変だったんだよ」と遊園地で遊んでいる最中、彼女が僕にその経緯を話してきたのをよく覚えている。けれどそれは、少しでもいいから自由を与えてあげたいという病院側からの優しさなのだと僕はその時思った。

　でも正直なところ、なぜ彼女が僕なんかを誘ったのかが分からない。

　彼女は学校の中ではそれなりに可愛かったし、性格も明るくて周りの人たちから好かれていた。それに対してパッとしない見た目の僕。自分で言うのもなんだけど、根暗で卑屈。唯一特徴があるとすれば今掛けているこの丸眼鏡くらいだ。それ以外僕に何の取り柄もないはずなのに、どうして僕なんだろうか。彼女ならもっとお似合いの人がいただろうに。それこそもし好きな人でもいたらその人と一緒に行って、あわよくば告白でもすれば……って、終わりが来ると知っていて告白するのも虚しいだけか。

　でもあの時、残り僅かの命だったというのに彼女はずっと明るかった。

　普段と変わらず……いや、普段より心なしか輝いて見えた気がする。

　僕の思い込みかもしれない。けど、終わりへと歩みを進める人間にはまるで似つかわしくないほど眩しかったあの笑顔は、今も瞼の裏に鮮明に焼き付いている。

『次あれ乗ろうよ、あれ！　あのカップ回すやつ！』

　ワンピースを翻し、指を差す彼女。まるで無邪気な子どものようにはしゃぎながら、背中まで伸びる綺麗で長い黒髪を風に優しくなびかせる。

　僕はその姿を掴まえようとするも、伸ばした手は虚しく空を切る。

「何やってんだ……俺」

　過去の面影だ。もう届かない。そこに彼女はいない。分かっていたことだ。

　なのにどうしてだろう。こんなにも彼女のことが頭から離れないのは。

　もしかしたら、僕は彼女のことを——

　遠くから穏やかな音色が聞こえてくる。

　気が付けば、いつの間にか閉園時間を報せるアナウンスが流れていた。

　あんなに忙しなかった人の波が今ではすっかりと止んでおり、ふと頭上を仰げば、空はぶどうのような夕闇色に染まっていた。

「……結局、何もなかったな」

　彼女のあの言葉は一体何だったのか気になるが、閉園時間が迫っていては仕方ない。

　僕は足早に出口へと向かうことにした。

　園内はすでに静まり返っており、見える範囲に客は一人もいなかった。

　……ああ、出るの遅くて怒られそうだな。

　そんなことを思っていると、ふと声が掛かった。立ち止まり、声がした方へと振り向いてみると、二十代後半くらいの女性がこちらにやって来ていた。格好を見るにどうやら係員の人らしく、自分の予想が的中したのだと聞かずとも察することができた。

「すみません、すぐ出るんで」

　軽く頭を下げ、僕は再び足を動かそうとするが——

「いえ、そうじゃなくて……。もしかして、遠藤彼方さんですか？」

「え？　は、はい、そうですけど……」

　不意に自分の名前を呼ばれたことに驚きを隠せず、ぎこちなく返事をしてしまう。

　ひょっとして僕の知り合いかと不思議に思い彼女の姿を注意深く見てみるが、しかし顔に見覚えはないし、心当たりもなかった。

　なので十中八九彼女とは他人のはずなのだが……。

「よかった、違ったらどうしようかと。……それにしてもほんとに写真のまんまですね」

　彼女は手に持っていた僕の顔写真と僕を見比べながら物珍しそうに息をついた。

「そりゃ写真なんだから当たり前でしょ」

「いえ、デフォルト状態というか、どこにでもいそうな顔つきというか」

　まだ会って数秒というのに失礼すぎやしないだろうか？　……ん？　いやちょっと待って。

「え、なんで僕の写真持ってるんですか？」

「ああ忘れていました。ちょっと待っていてください」

　そう告げて彼女は一度踵を返した。

　不可思議に思いながらも一応言われた通り待っていると、一分後、彼女が何かを手に持って戻ってきた。

「はいこれ、彼女さんからの預かりものです。それじゃあ」

　そして彼女は謎の紙袋を僕に手渡してきた後、風の如く去っていた。

　その背中を見つめながら僕はため息を零す。

　……いや彼女いませんし。

　そう内心で呟きながら紙袋に視線を落とす。怪しさ満点なのは言うまでもないが、さて一体どうするべきか。

「とりあえず、帰って考えるか」

　そうして僕は再び歩き出した。

* ＊　　　＊

　風呂に浸かり終え、二階の自室のドアを開ける。

　机やベッドなど必要最低限の家具しか置かれていない殺風景な部屋の中、電気もつけず僕は椅子に腰を落とす。傍にあったライトのスイッチを入れると、ほのかな灯りが僕の周囲を照らした。

「で、これは一体何なんだ？」

　机の端に置いていた紙袋を手に取る。恐る恐る中を覗き、そして中身を取り出した。

　入っていたのは、サッカーボールほどの小さなテディベア。長い間使い古されていたのかそのぬいぐるみはほこりを被り、ところどころ糸が解れていた。

　そしてなぜか僕は、そのぬいぐるみに見覚えがあった。

　思い出そうと僕は記憶を振り返り、そしてその理由に辿りつく。

　あれは確か僕が小学三年生の時。遥とだんだんと疎遠になる前のことだ。

　当時は彼女とも仲が良く、ほぼ毎日のように遊んでいた。二人ともまだ幼いこともあってか、男女二人でいることに何の躊躇いも恥ずかしさもなかった。

　そんなある日、僕は彼女に誕生日プレゼントをあげた。それがこのテディベアだった。首についている大きなチェック柄のリボンが印象的だったので何とか思い出すことができた。

　あの時の会話は今でもよく覚えている。

『これ、あげるよ』

『なに、これ？』

『プレゼントだよ。今日誕生日だろ？』

『え、誰か誕生日の人いるの？』

『お前だろ。なんで自分の誕生日を覚えてないんだよ』

『あはは、彼方がプレゼントだなんて変なの』

『お前の方がよっぽど変だろ』

　そんな感じで、僕たち二人は無邪気に笑いあった。

　そしてその後に彼女から告げられた「ありがと」という言葉に胸が高鳴ったのを覚えている。

　ふと懐かしさがこみあげてくる。

　あの時はまだ幼くてその感情の意味なんて全然分からなかったけど、今思えばあれが僕の初恋だったのかもしれない。とは言っても中学生以降積極的な交流は減ったし、もっと言えば彼女はもうこの世界にはいない。

　いまさら過去を悔やんだりしても、後の祭りだ。

　そこでようやく気付く。

「ってことはこの紙袋の送り主は遥か？」

　そう言えば遊園地に一緒に行ったあの日、彼女は同じ紙袋を持っていた気がする。それがなぜか帰る頃にはなくなっていたが、べつに僕はそこまで気にしていなかった。おそらく僕がトイレなどで離れている間を見計らって、あの係の人に預けたのだろう。

　けれど、一つ疑問に残ることがある。どうして直接渡さなかったのだろうか。どうせ僕に渡すつもりだったのならこんな遠回しで面倒なやり方をせずに直接渡した方が手っ取り早かったはずなのに。

　けれど僕がここでいくら考えたところで、もうその心境を知る者は誰一人としていない。その答えを得ることは絶対にできないのだ。

　……いくら眺めたって虚しいだけか。

　そう心の中で吐き捨て、テディベアを紙袋の中に戻そうとしたところで、中にまだ何か入っているのに気がついた。ぬいぐるみを机の上に置き、紙袋の中に手を入れる。

　入っていたのは——

「……手紙？」

　アンティーク風なシックな色の封筒で、僕が彼女に抱く印象とはまるで違うが、これはこれでまた何だか違う面白みがあった。

　封を切ると、折りたたまれた三枚の便箋がでてきた。これまた彼女に似つかわしくないデザインだったが、書き綴られた文字は紛れもなく彼女の字だった。

　そして僕はそれに目を通す。

『拝啓　遠藤彼方様

　なんて丁寧に書くとやっぱり堅苦しくなっちゃうので、自然に、私らしく書くことにするね。

　今病室でこの手紙を書いているけど、どうもこの場所には慣れないよ。窓から照りつける日差しは暑すぎるし、日中は蝉の鳴き声がずっと聞こえてうるさいし、病院特有の消毒剤のにおいは鼻がむずむずするし、ほんと最悪だよ。できることなら今すぐここから抜け出したいけど、それを主治医の人に言うといつもダメって怒られるの。ほんとケチだよね。君もそう思わない？　けどつい最近、やっと許可が下りたよ。ほんとに苦労したよもう。せっかくだし、明日君を誘って一緒に遊園地でも行ってみようかな。って君がこれを読んでいる頃にはもしかしたらもう行ってるかもしれないね。楽しい時間になってるといいな。

　ところで話は変わるけど、つい三週間前に一カ月の余命宣告を受けたよ。自分が死ぬなんて実感は湧かないけど、でもあと一週間もすれば私はもう多分この世界にはいないんだろうな。そう思うとなんだかちょっと怖くなるな。君は私がいなくても平気？　一人でも大丈夫？　ひょっとするともうとっくに私のことなんか忘れて誰かと結ばれちゃったりして。ってそもそも私たち付き合ってなかったね、うっかりうっかり。

　そう言えば小さい頃に君からプレゼントをもらったね。今思えば誰かからプレゼントをもらったのなんてあれが初めてな気がするな。ほんとに嬉しかったよ。ほんとだよ？　でももうすぐ私はいなくなるから、そうなったらこの子も寂しいと思うのでテディ君は君に預けます。あれ、君にこの子の名前を話すのって初めてだっけ？　まあいいや、絶対笑わないでよ。それと、これからは君がこの子を大事にしてあげてね、約束だよ？

　そうと決まったところで明日の遊園地、楽しみだな。って気が早すぎるね。でも君のことだから快くＯＫしてくれると思うな。それで開園から閉園までもう動けないっていうくらい一緒に遊びつくして、その日という最高の一日を君と過ごすんだ。そしたらこの手紙を君に渡す……って思ったけど、多分私は君に渡せていないんだろうな。だって最初から直接渡さない気満々だし。どう、合ってる？　恥ずかしくて、切なくて、辛くて、今思うだけでも胸が痛いよ。だからこの手紙は遊園地の係員さんにでも預けるとしよう。うん、そうしよう。私の事情を説明したら多分了承してくれるはずだ。君は私のことを意気地なし、へたれと思うかもしれないけど、自分の素直な気持ちを直接伝えるのは結構勇気がいるものだよ？　一度も告白したことのない君には分からないかもしれないけどね。

　おっと、そんなことを言ってると長くなりそうなのでそろそろにするね。

　最期くらい綺麗に締めようかな。

　君がこの手紙を読んでいる頃には私はもう多分いないけど、君は私がいなくてもそこまで気にしてないかな？　君が何に触れ、どう感じているのかが気になります。

　君がいま見ている空は何色ですか？

　君がいま過ごしている季節はいつですか？

　君がいま生きている世界は、君にとって輝いて見えますか？

　私の知らない世界を知っている君が羨ましいです。

　私の知らない君がそこにいるのだけで羨ましいです。

　もしもそこに、君の隣に私がいたら、君は今頃どうしていたんだろう。

　私は、どうしていたんだろう。

　いつもと変わらない疎遠な関係？　それとも……。

　けれど、そう願ってももう遅いのは分かっています。

　今頃になってこんなことを思うのは、夢見るのは卑怯なのかもしれません。

　でもやっぱり伝えさせてください。

　遠藤彼方さん、私は君のことが好きです。

　世界中で誰よりも大好きです。

　私はもうすぐいなくなるけど、私のことは忘れてください。

　最初から私なんていなかったんだって、そう思ってください。

　そして、これからも元気に生きてください。

　それだけが今の私の願いです。

　本当に、大好きでした。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　敬具

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　七瀬遥　』

　手紙を読み終えて、気が付いた。

　じんわりと滲む視界。頬に何かが伝う感触。

　僕は、泣いていた。

「……くそっ、なんなんだよもうっ」

　嗚咽が止まらない。止まってくれない。

　そこには僕の知らない彼女の一面があった。

　僕が好きだった、いや、好きだと気づかされた人。

　いまさらになってそんな大事なことに気付いた。

　でも、もうそこに彼女の姿はない。この世界に彼女はいない。

　どこか遠い、遠い空の向こう。遥か彼方へと飛び去ってしまった。

　けどもしいつかまた逢えたなら、もう一度出逢うことができたなら、その時は——